

神を待ち望め

20日は、米国大統領の就任式であり、6日に続いてトランプが武器をもった支持者たちの蜂起を扇動しないか心配をもって迎える日である。ひたひたと身近に迫っているコロナウイルスの感染拡大を適切に恐れて迎える日々の一コマであり、Mさんの臍臓の腫瘍の生体検査の結果がわかる日でもある。（入院中のY子さんから、ベッドの上で書かれたメールを昨日12時前に受け取った）。日本の政治・官僚機構の迷走・暴走も気になる。

今夜も共に、詩編に耳を傾け、祈りたい。まず、それぞれが詩編43編をできれば声を出して読んでみよう。詩編43編は先回述べたように、42編の続きというか第二部であり、「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ/なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう/『御顔こそ、わたしの救い』と。わたしの神よ。」(5節)が42:6, 12節に続きリフレーンとして登場している。それぞれが固有のあるいは共通の危機に直面する中で、不安と絶望、孤独から物事を考えるのではなく、それらを踏まえて、「神を待ち望む」希望と神の慈しみ(1節)を祈り求め、神が派遣して下さる「光」と「まこと」と共に生きよう。

私は、協力牧師として、コロナウイルス感染拡大下、礼拝に来るかどうかも迷っている人に代わって教会として来ないでくださいと言ってあげる方がよいのか（しかし、それは厳密には個々人の決断という人格の尊厳の侵犯である）、あるいは、自分で決断しなさいというべきか（しかし、それはいわゆる「自己責任論」への逃避ではないか）の狭間で悶々とする日を過ごしている。それは東福岡教会笠井牧師・園長や執事会の悩みでもあろう。先日、1月11日の九州バプテスト宣教センター主催の教会形成協議会で語られた鈴木牧人さんの「一人一人はコロナウイルス感染の危機によって傷ついている被災者である」という言葉が胸に迫ってくる。

1. 神の裁きを望む

繰り返し言うが、信仰者は神の裁きを求め、私を正義と慈しみで裁き続けて下さい（ミシュバート、慈しみと義の審判 šāpōtênî, Qal. Imperfect, sing. Masc. suff. I pers. sing. シャーフアート）と求める。肉なる人間の尺度ではなく、神が裁き、評価して下さることを祈り求めよう。「わたしに代わって争ってください」（私の訴訟を弁護して下さいという願い）。来る1月27日（水）安保関連法案違憲福岡訴訟の最終弁論で、私が原告を代表して最終陳述を行うが3人の弁護士が弁論を行い支援してくれる。神が弁護士であるとはいかに力強いことか！ヨハネ14:16、25、15:26、16:7にあるように「聖霊」は私たちの傍らにイエス様と共におられる神である。Iヨハネ2:1によればイエス・キリストもまた「弁護者」である。「わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます」という。また、IIコリント1:3-7において父なる神もまた「慰め主」「弁護者」であると繰り返されている。私たちは決して独りではない！「慰め主」「弁護士」である、父とみ子と聖霊の三重の一つの愛の神に伴われているのだ。

2. 敵対する者に直面したとしても

信仰者には、あからさまに、あるいは、密かに、私たちに訴え、陥れようとする力が働いている。神の「慈しみ」(hāsīd) (を知らぬ) ある民、欺きかつ不正な者、(from the man of deceitful and unjust) らである。冠詞つきであるから信仰者には具体的に「その人」が見えていたのかも知れない。2節には「敵」という言葉が登場する。信仰者は「わたしを救ってください」(təpallətēnī, Piel. Fut. 2nd pers. Sing .suff. let escape from) と懇願する。

3. あなたはわたしの神、砦である

42:10は「わたしの岩」というが、43:2では「わたしの砦」という。敵が攻めて来ても「砦」が護ってくれる。2節の先頭の言葉は「なぜなら」という理由付けの接続詞(kī)である。なぜなら「あなたは私の力の神('lōhē mā'ūzzī, 強い場所、砦、避難所、アシュラム)だからです。」というのである。

4. なぜ、わたしを見放されたのか？

主イエスが十字架で叫んだ「見捨てる＝アザーブ」という用語ではないが、「ラーマー コーデル？」qōdēr 混乱させられる、暗いという意味から、喪に服す、悲嘆にくれるという謂の動詞が用いられている。なぜ私は悲嘆に陥るのでしょうか？というような感じである。Qal. Past. Part. Act. Sing. Masc. 人は人生においてこのような経験を通るのである。キリスト者は常に、「お前は神に従った。ではなぜ、神はお前を助けてくれないのか」という世の嘲りの中に生きるのである。現実主義(realism)と理想主義・観念論(idealism)の間の狭い道を歩め！

5. あなたの光とまことを派遣して下さい

その中で、それでも信仰者は神に向かって祈る。「あなたの光と真実を送り出して (šəlah 'ōwrkā wa'āmittākā あなたのアーメン・真理を派遣して下さい)、と願う。通常、慈しみと真実というセットで登場する慣用句の代わりにここでは「光」と「まこと」という表現に替えられている。2節の「わたしを見放されたのか」が「暗い」処に行かせるという闇のイメージを持っているので、それに対峙して「光」と表現しているのかも知れない。それら・彼らによって私を導かせ、聖なる丘へと「導いてください」と祈る。神は「光」と「真実」を派遣して、私たち信仰者に伴ってくださるのである。光と真実(真理)の二人の(み使い)が共に行って下さるとは！

6. 神と神礼拝を喜び祝い、感謝の歌をうたう

信仰者の人生の結論は、神に近づき、神と神を礼拝することであり、喜び祝い、感謝を捧げることである。「嘆きと願いは、過去の神経験から発して現在の危機を克服したうえ、希望をいだいて未来に向かって歩む信仰の頂点で解消する。」(A. ヴァイザー)「この詩の宗教的な価値は、神を慕う心が神から何を受けるかではなく、神において何を所有するかを問う点にある。」(同上)